

# 「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」 研究開発プロジェクト事後評価報告書

平成 27 年 6 月

研究開発プロジェクト名： 科学技術への社会的期待の可視化・定量化手法の開発  
研究代表者： 玉村 雅敏（慶應義塾大学総合政策学部准教授）  
実施期間： 平成 23 年 1 月～平成 26 年 1 月

## 1. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況

目標はある程度達成されたと評価する。

本プロジェクトは、①「政策マーケティング」、「討論型世論調査」、「SROI（社会投資収益率、Social Return on Investment）」の科学技術領域での適用・応用を検討し、②これら 3 つの手法を有機的に組み合わせた「科学技術への社会的期待を可視化・定量化する手法」を研究し、③政府、地方自治体、関係機関、シンクタンク等への導入を想定したガイドラインを開発することを目標とした。研究開発の実施により、これら 3 つの手法を有機的に組み合わせた統合モデル（科学技術への社会的期待の可視化・定量化手法）が提案された。また、ガイドラインの公開および書籍の刊行を通して、各機関等での導入に向けた解説が広く利用可能な形で提供されている。なお、研究開発途中で、対象とするテーマの選択（出生前診断、遠隔医療）および討論型世論調査と SROI の位置づけの変更が行われたが、それらが本プログラムの目的に照らして適切であったかという点については、十分に説得力があるとは言いがたい。また、手法の適切性や有効性の検証が計画に含まれておらず、現時点では実施されていないことから、今後の検証が望まれる。

## 2. 政策のための科学プログラムの目的達成への貢献状況

○成果は、現実の政策形成に効果・効用をもたらすことができる程度期待できると評価する。

成果がガイドラインおよび書籍として公開され、広く活用し得るように図られていることから、地方自治体などで活用されることが期待される。

○本プロジェクトは、学術的知見あるいは方法論等の創出にある程度貢献しているものと評価する。

方法論等の創出という観点からは、統合モデルとともに、その実施のためのガイドラインおよび書籍が公開されており、展開に期待がもてる。学術的知見の導出という観点においては、関連する国際学会における発表から一定の学術的評価が得られる可能性が窺えるものの、モデルの妥当性の検証が課題として残されている。

○成果は国際的水準からみて一定の水準に達していると評価する。

関連する国際学会における発表等が積極的に行われ、その反応から一定の評価が得られる可能性があることが窺える。

○本プロジェクトは人材育成やネットワーク拡大に一定の貢献をした（期待できる）と評価する。

若手研究者を中心とした活動により成果が導出されている。それぞれの手法の実施、ガイ

ドライン作成等を介した人材育成、公共選択学会などを始めとする国内外の学術研究活動および政府、藤沢市などを始めとした国、地方自治体などでのネットワーク拡大など、一定の成果が認められる。

### 3. プロジェクト目標達成に向けた取り組みの状況

○研究開発活動は概ね適切に行われたと評価する。

プロジェクトの進行に合わせて、適宜見直しがなされたことにより、一定の成果につながったものとする。一方で、より効果を高める観点からは、研究開発実施中に、統合モデルの妥当性の検証方法に関するアイデアや実施の可能性を検討すべきであった。

○研究開発の実施体制および管理運営は概ね適切であったと評価する。

研究代表者が、若手のプロジェクト・メンバーを統括し、プロジェクト全体を概ね適切に取りまとめて実施していたと考える。討論型世論調査が、手法を検討する観点での資料作成にとどまった点については、今後、実際に適用する実践が望まれる。

### 4. 総合評価

一定の成果が得られた（一定の期待がもてる）ものと評価する。

上述のとおり、独立した3つの手法を統合して新たなモデルが提案され、ガイドラインおよび書籍として広く活用可能な形で発信されていることは今後の展開につながるものと期待される。現時点では、統合モデルの妥当性等の評価（たとえば既存の手法との比較）がなされていないこと、手法の適用限界や実施コストについても示されていないことから、今後、地方自治体などで実施例を積み上げ、ガイドラインの維持、改訂に向けた取り組みが進むとともに、モデルの妥当性の検証が望まれる。